

平成十四年一月二十二日 最終講義

我が教学研究五十年

浅井 円道

皆様こんにちは。遠近を問わず、私の最終講義のためにお集まりいただきまして、非常に嬉しいことです。人生で最も嬉しい、嬉しいと言つてはいけないかもしれませんが、嬉しいことでございます。去年の三月に神経痛を患いまして、それ以来爆弾を抱えているような按配でございます。こうやつてお話しておりますも、今はそうでもないんですけれども、痛みがくるんです。これは大変だと思ひまして。今は神経痛になってから初めての冬でございまして、爆弾がいつ破裂するかという事は、なかなか予測がつかないものでございます。痛くなったりどうかして、大学や、本山の皆様方にご迷惑かけるようなことになつても大変だという風な思ひもありましたので、一期満了いたしましたことについて法主、理事長に退職のお願いをいたしました次第でございます。しかし、これでもって身延山との関係がなくなるというわけではございません。在学四年間のあいだに、東洋文化研究所を中心として、行学院日朝上人のお書きになられた、諸々の膨大なる書物をなんとか研究所の一貫した事業のひとつとして今後やりましよう、やりだしましたんですけれども、なかなかどうも「牛歩」でございます。進み方が遅い。私自身も、ここで辞めてしまふということで、行学院日朝上人から去つてしまつたのではせつかくの身延山に二度めにお勤めした、

その志にも違ふことがあるというので、法主からの要請もありまして、行学院日朝上人の「補施集」、私は「御書見聞」で勉強いたしました。四年間のあいだにだいたい全部、朝師のものは読めるようになったという、自身を持っていきます。同じ行学院日朝上人が書かれた見聞であり、補施集ですから見聞を読めるようになったということは、補施集も読めるだろうと。と、いうことは、まだ補施集の御真筆を例えば一時間なりあるいは二時間なり見た経験がありませんので、予測に過ぎませんけれども、たぶんわかるだろうというので、それを今後目の黒い間、身体が動く間は読み続けまして、適当な分量になるごとに、例えば一ヶ月に一遍とか、二ヶ月に一遍ぐらい身延山に参ります。研究所及び本山にそれを手渡しするというようなことを志しておりますから、最終講義ですけれども、最後ではございません。まだ、身延へのご奉公と言いますか、日朝上人へのご奉公は、命の通わんほどは、続けるつもりでございます。

さて、私は今七十七（実年齢）と申しましたけれども、家内が満の七十、結婚五十周年と三つ重なります。そして、忘れてならないのは立教開宗七五〇と、四つも五つも重なっております、こういうときに私が身延山を辞めるということは、私にとって非常に大きな節目になることであらうと思っております。

さて、今日のお話でございますけれども、二つのことをお話したいと思えます。題は「我が教学研究五十年」というのが、その本題ですね。しかし、最終講義でございますから、「観心本尊抄」を三年間受け持たせていただいた、本年も「観心本尊抄」を受け持ちましたんですけれども、残念ながら本年は私自身は欠席届けを大学に出したの二度しかなかつたはずなんですけれども、火曜日という時間が多くつぶれたんですね。それで、本尊抄の題目段と、本尊段までは読み終えた。そこから先の弘通段というところは、まだ読まないで一年の講義が終わってしまいました

ので、この際、本尊抄を締め括りたいということがひとつと、もうひとつは、研究五十年と、正確には我が研究生生活五十三年でございますけれども、お話ししたいと思います。

一番目に、「観心本尊抄」は、どういう書物であるかといえますと、言うまでもなく、日蓮聖人のお書きになった四百余篇の御遺文の中で、最第一の秘書ですよね。三人四人、座を並べて読んじやならないぞ、と言われていた秘書。その中で、何が書いてあるかと申しますと、お題目と、御本尊、それからお題目と御本尊は、いつ流布するか、誰が流布させるか。その三つのことが、「観心本尊抄」には書いてあります。

第一の、お題目につきましては、これを締め括りますと、久遠の昔よりこの方、三世に渡って、衆生、人々に大慈悲を垂れてこられた。というのは、一念三千を識らざる者には、仏大慈悲を起こして、この珠を五字に包んだ。ということをおっしゃった。仏の大慈悲、これをお題目、そのお題目を、日蓮聖人に授与なさった。上行菩薩、日蓮聖人に授与なさって、それを日蓮聖人が御布教になった訳ですから、仏の大慈悲を垂れてこられたお釈迦様の因行、久遠の昔の成道以前の因行、復倍上数の因行ですね。と、それから、果徳。五百塵点以前の成仏以来三世益物してこれらた果徳とを具足している、これをお題目、それでこれを受持すれば、お釈迦様の功徳を頂戴することができますけれども、それを受持しなければ、相も変らぬ素凡夫だということを日蓮聖人は「観心本尊抄」で初めてお話しになりますね。これは一念三千から出発する。

それから二に、御本尊は、十界勧請の大曼荼羅で、その大曼荼羅のことを次に、「この仏像」とおっしゃって、これは一尊四士の仏像でもある。本尊抄にそう書いてある。さて、宗祖は仏様と同様に時、説くべき時、今は説いちゃだめ、機はあっても時がなければ説かないと、今まさしくこれその時という時がこななければ、説かないというそのこ

とを非常に厳格にお守りになりました。我々は、解ったとなるとすぐに喋ってしまいますけれども、お釈迦様や日蓮聖人はそうじゃない。今解っておるけれども、今はだめだ。もう少しして、こういうときに説きましようということをお我慢強くと言うんでしようか、忍耐強く守っておられました。本尊抄におきましても、二、三の問題はですね、まだ伏せておられた。完璧にはお説きになつてはおられなかつたということをお話して、本尊抄講話を締め括りたいと思います。

第一番目は本尊、第二番目は三国三師と三国四師、第三番目は本門の一念三千。第一番目の本尊は、「其の本尊の体てい為らく、本師の娑婆の上に宝塔空に居し、塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏。釈尊の脇士は上行等の四菩薩、文殊・弥勒等の四菩薩は眷属として末座に居し、迹化他方の大小の諸菩薩は万民の大地に処して雲閣月卿を見るが如し。十方の諸仏は大地の上に処したもう、迹仏迹土を表する故也。」ということが、昭和定本の七一二頁から七一三頁に書かれております。これが御本尊の体為らく。「其」というのは、その前に書いておられる四十五字の法体段を行法として、御本尊ですから、礼拝の対象ですから行法ですね。四十五字の法体段の、その本尊の体為らくは、といつてお書きになっているところは、これ十界勧請の大曼荼羅なんですね。それは、佐渡始頭の大曼荼羅、閏が五月にあつて、七月の八日でございますね。だから三ヶ月後であります。本尊抄は四月二十八日で、二ヶ月だけど、閏が入つて三ヶ月と。三ヶ月後にお書きになつた、佐渡始頭の大曼荼羅。これは遠沾亨師が書写しておられ、法主猊下が入山なさつたときにその遠沾亨師の「御本尊鑑」をお参りに来られた御方全員にお配りになりました。それをいただいてすぐに、見せていただきましたけれども、佐渡始頭の大曼荼羅は十界ですよ。もつと正確に言うならば、地獄界と畜生界が無い。全部揃うのは、「御本尊鑑」によりますと、弘安二年の御本尊以後ですね。ところが、今は二

界でしよ。仏界と菩薩界の二界だけです。地獄・餓鬼・畜生というような方々は、まだ勧請されていない。それはどうしてかということ、浅井円道なる凡夫の愚推に過ぎないだろうと思つて聞いていただければいいだろうと思ひますけれども、いっぺんに地獄も餓鬼も礼拝しなさいと言つたらびつくりするじゃないですか、皆さん。そうしろと言われた方々はびつくりするでしょう。だから小出しになさつていかれた。時が来たらと。段々、十界勧請の大曼荼羅に皆さんが慣れてきたら、その時に、妙法五字の光明に照らされて、十界円備のお姿を、皆さん方の目の前に出して差し上げましょうというようなお気持ちから、最初は一番中心になつているところからお出しになつて、それから段々広げていかれて、最後、全部お顕しになつたということだろうと思ひますね。それは弘安二年、「御本尊鑑」による限り。時を待たれたということが一つです。それから本尊抄では、二界、つまり仏界と菩薩界と、これを拝めといわれる。その点は文句無い。それが一つと。

それから、二つ目は三國三師と三國四師というのは、本尊抄の中に、「夫れ仏より滅後一千八百余年に至るまで、というのは伝教大師の時までが滅後一千八百余年に至るまで、三國に経歴して但だ三人のみ有つて此の正法を覚知せり、」三人のみが法華經を知つたと。「所謂る月支の釈尊、真旦の智者大師、」天台智者大師、天台大師といひ方よりも、智者大師という呼び名が、天台大師の本当の大師号ですよ。「真旦の智者大師、日域の伝教、此の三人は内典の聖人也」と、本尊抄の七〇九頁。三人です。三國三師。ところが、四十六日後にやはり佐渡でお書きになつた「顕仏未來記」には、「天台大師は釈迦に信順し、法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し、法華宗を助けて日本に弘通す等云々。」と、これは法華宗の言葉、伝教大師の言葉です。そこまでは。それから、「安州の日蓮は」といふ所が日蓮聖人の言葉で、「恐らく三師に相承し」釈尊・天台・伝教の三師に相承し、「法華宗を助けて末

法に流通す。三に一を加えて三国四師と号く」と。僅か四六日後ですよ。観心本尊抄は三国三師だった。ご自分を加えておられなかった。ところが四六日後、同じく佐渡で、ご自分をお加えになって三国四師とおっしゃった。これは単なる飛躍じゃないですね。言うべくして言わなかったんですよ、本尊抄では。お言いにならなかったのはどうしてかと言いますと、「日本国に此法顕る、こと二度なり。伝教大師と日蓮となりと知れ」と。「開目抄」です。ですから、伝教大師の次にご自分を加えるということは「開目抄」で既におっしゃっておられたことにはおっしゃっておられませんが、ところが、まともにおっしゃるときには本尊抄では釈尊と天台と伝教だと。そうおっしゃって、自分を外しておられたんですね。最初からわしもだよ、と言うと皆やはり、びつくりするわけですよ。「をそろしくてをそろしからず。みんないかにをぢすらむ」（開目抄）。怖じさせちゃいけないというので、おそらくこれも凡夫の凡推ですよ。日蓮聖人は説明しておられないから、そういう風に浅井円道は愚推をするわけです。愚推ですよ。これが二番目です。

三番目は、これは本尊抄において隠しておられたんじゃないなくて、本尊抄で初めておっしゃった。それまではおっしゃりかけて途中でやめてしまっておられた。三つ目はですね、「十章抄」文永八年五月ですから、あと五ヶ月すると佐渡にお流されになります。「十章抄」というのは「摩訶止観」についての説明という意味です。「摩訶止観」は十章から成り立っておる。「十章抄」というと「摩訶止観」です。「一念三千の出処は略開三の十如实相なれども、義分は本門に限る。爾前は迹門の依義判文、迹門は本門の依義判文なり。但だ真実の依文判義は本門に限るべし」と。こういう言葉があります。これを解釈しますと、一念三千という法華経の珠、これの出所は、略開三の十如实相というのは、唯佛與佛。乃能究盡。諸法実相。所謂諸法。如是相。如是性。如是體。如是力。如是作。如是因。如是縁。如是

果。如是報。如是本末究竟等。というところが、略開三顯一段。この部分はお釈迦様が「一切声聞辟支仏所不能知」といつて法華説法をお断りになるところです。今から法華經が説かれるんだということは序品にあります。序品に二回か三回か。日月燈明仏の昔を、文殊師利が弥勒の問いに応えてお話しするわけですよ。こういう事があつたよ、昔は。やはり、此土六瑞、他土六瑞というのが昔もあつた。その後、無量義処三昧から立つて日月燈明仏は、法華經をお説きになった。それで、それは諸法実相義だと書いてある。序品に。ですから並み居る人々は、全員が今から法華經が説かれるよ、その中身は諸法実相義だよということは既にわかつておる。それを説いてくれ、唯願説之。唯願説之と、舍利弗が三遍お釈迦様にお願ひするから、それじゃあ説いてあげましょうかと言つてお説きになったのが、欲令衆。五回繰り返されますね。だから五仏章とも言われておる。欲令衆というのは法説周というところが始まつていくわけですよ。そうすると、一念三千の出所は、略開三顯一の十如实相であるけれども、その十如实相の意味合いということは、本門に限るよと。どうしてかはわからん。略開三の十如实相だということは、天台が「法華文句」それから「法華玄義」の法について衆生法のところの説明しておられますから、略開三から出ておるということはわかる。しかし、その意味合いは本門からだというのがよくわからないですよ。スーッとばかりはわかつてこない。で、爾前は迹門の依義判文、爾前經、法華經以外のお経は、迹門の義に依つて文を判ずればわかる。迹門の義、迹門の意味合い、迹門が所有しておるところの仏の心によつて、爾前經の文章を読めばわかる。それから迹門は本門の依義判文というのは、迹門は本門の義に依つて文を判ずれば、迹門のお経の意味がわかるよ。但だ眞実の、今度は依文判義だから、お経文どおりに意味を受け取ればわかるということ、本門に限ると。そこまで止まりですよ。そこまで後はびしゃつと切つてしまつておっしゃらない。何にも。何でかということをおっしゃらないものだから、皆も読

んでわからないよ、もう少し何かおっしゃってくださいと、恐らく皆さん頼んだ筈ですよ。そして、初めてその意味合いを説かれたのは、本尊抄。これは四種三段の中に、本門三段があって、それから今度、本法三段（本門観心）があります。これは南無妙法蓮華經。で、その前の本門の三段。これは教相のところですね。そのところで、迹門と本門とを比較をしますね、日蓮聖人はこうおっしゃられた。「所説の法門も天地の如し、十界久遠の上に国土世間既に顕わる。一念三千殆んど竹膜を隔てたり。」一念三千という天台の「摩訶止観」の観心文と、本門の教相としてのお経との間には竹の膜ほどの隔たりしかない。竹の膜というのは皆さん方も知っておりますように本當に、オブラートみたいですよ。それくらいの隔たりしかありませんよ。それはどうしてかという、十界久遠の上に、十界久遠というのは「開目抄」の本因本果。お釈迦様が久遠実成を開顕なさった本果、それによって我々信徒も、お釈迦様の久遠に付随して久遠の所化になったわけですよ。お釈迦様お一人おられて、あと我々が全然いなんて世界はあり得ないですよ。お釈迦様がおられる所、必ず我々聴聞者がおる。お釈迦様の久遠にひかれて、我々も久遠の昔から法華經を聴き続けてきたということです。それが十界久遠。仏界が久遠だから、従って仏界に付随しておるところの九界も、久遠だと。だから十界久遠、本因本果と。この上に、国土世間既に顕わるというのはですね、迹門では国土世間の開顕がありませんでした。「三界は安きこと無し 猶お火宅の如し 衆苦充滿して 甚だ怖畏すべし」とありますね。譬論品にありますね。そうすると、極端な言い方をすると、三界（我々の世界）は地獄なんです。ところが如来寿量品にまいりますと、「我常在此 娑婆世界 說法教化 亦於餘處」という言葉が本国土妙の典拠です。お自我偈でまいりますと、「衆生劫盡きて 大火に焼かると見るときも 我が此の土は安穩にして 天人常に充滿せり」衆生の目には、劫が盡きてと言うんだから、壞劫になっている。壞劫になって、大火、大水、大風が

起こる。そして地球上が何にもなくなつて、エンペラーになつてしまふ。あなた方は大火に焼かれつつあると見ておるだらうけれども、我が此の土は私の目から見ると安穩だと。仏様の心から見ると安穩だと。それから、「我が浄土は毀れてざるに 而も衆は焼け盡きて 憂怖諸の苦惱 是の如き悉く充滿せりと見る」というのもそうですね。我が浄土は毀れてないんだよ、しかも、人々はいい事は何にもない、憂いや苦惱しかないと思つてゐる。しかし、それは違ふんだと。仏の心においては、浄土なんだということですよ。だからやっぱり人間の心の置き様だと。今、一念三千と言いましたけれども、一念三千はですね、方便品の十如実相からでしょ。十如実相というときの實相は何かという中道です。それはおそらく、天台がですね、「大般涅槃經」の中に、中道がたくさん出てくるんですよ。『大般涅槃經』は法華經の流通分ですね。この經を天台大師も讀んだ。それから二祖の章安大師はその注釈書を書いたということ、そこから中道が出てくる。それからもう一つは龍樹。龍樹の『大智度論』、それから『中論』と。そういうものから中道を取り出した。で、三大部を讀んでいますと、「中道実相」、「中道実相」という言葉がよく出てきます。では中道とは何だ、実相とは何だと。実相というのは『大品般若經』にもしよちゅう「諸法実相」、「諸法実相」と出てくるよ。では、法華經の「諸法実相」とどう違ふんだというと、私も最初はどう違ふんだらうと思つていましたけれども、案外簡単な言葉でその違いが書いてある。と、いうのは信解品の流れをみておきますと、窮子が長者から教育されて、やつと長者のお城の金銀財宝から日用品から、すべてのものを出し入れて精通しますよね。ところが、窮子は領知家業しても、家というのは長者のものだと思つておつて、窮子自身は相変わらず、偈頌に書いてありますけれども、「止宿草庵」、長行では「本処」、城の外の草庵から城の中に通つてきておつた。ところが、その長者はやがて自分の寿命も、もうそろそろ終わりだ。ついでには、一堂に國王、大臣から親類縁者、あらゆる人々を呼び集めて、

そして窮子をそばにおいて、窮子に向かつて長者は、これは我が子だ、この人の父親は私だということを窮子にも人々にも、初めてその事をお話した。そしたらば、窮子は大歓喜したということが書いてあるんですね。その場合にですね、領知家業というのが、般若で法開会、それから法華は我が子だと。つまり、人開会。これが般若の諸法実相と、法華經の諸法実相との違い。つまり、法華經の諸法実相は法開会のうえに人開会だということですね。そうしますと、法開会とか人開会とかいうのはいいけれども、一体、実相中道というのは何だ、どういうことなんだということになる。皆さんも字引きをお引きになったこともおありだろうと思いますし、いろいろお話しをお聞きになったこともおありだろうと思いますけれども。私が読んだり聞いたりしたところではですね、今ひとつすっきりしないんですね。何だかわからない。諸法実相、中道というのは何だと。それはですね、去年ですけれども、立正大学の法華玄義の講座で六の下を読んでいたんですよ。そうしますと、実相の異名という段がありましたね、そういうところを読んでいきますと、これは“仏の心、仏の眼”ということが書いてあるんです。だから、仏の心でみると例えば、いろいろな事したり、悪い事したりしている人間が多いけれども、悪い奴は悪い、いい奴はいいと、いろいろな判断があるけれども、しかし、仏の目から見ると、全部かわいいと。

そういう事ですよ。法華經は純円ですよ。専ら、円教のみと。円教というのは何かというと、玄義の説明ではですね、煩惱即菩提、生死即涅槃。これが法華經の法華經たる所以だということが書いてあるんですね。だけどこれはね、日本の平安末期から江戸の初期まで蔓延した中古天台によりますと、煩惱も菩提も同じなんだ。だから、煩惱まみれで怒ったり泣いたりしておるところ、それがそのまま菩提である。生死というのは苦しみ。苦しんだり、怨んだりすること。それが涅槃だというんで、日常生活の寝たり起きたり、笑ったり泣いたり、ひっくり返ったりしていれ

ばみんないいんだ。あととはすることはなにもないんだと。で、もし何か修行があるとすると、それは万金を投じて比叡山に登っていったですね、お師匠さんから、お前は仏だという切り紙をもらって、ああそうですかと。それでいいと。だから行というのはまったくない。ただ観念があるだけで、即という思想はそういうふうになってしまっている。だから危険性があるんですね。危険性があるんですけれども、元来は、仏の次元においては、仏の目から見ればということなんです。だが、我々がそういう次元に立っておるかという、我々はいちばん底辺におるわけですから、簡単に煩惱即菩提、生死即涅槃なんて言ってお安心しておちやだめだ。一生懸命になって修行しなければ、仏の次元に至らないと。しかし、蔵通別円とあるでしょ。別教は、次第行、円教は不次第行ですね。別教は信・住・行・向・地・等・妙、と。五十二位あり。十廻向までは断迷開悟で、十地から先が中道。十地以前は方便道ということ。ね。十地に仏の心があるということは、最初からわかっておるけれども、それ以前の段階じゃまだ手が届かないと。初地に入ってからしか中道の修行は、仏の心の修行はできないよと。華嚴ですね。東海道五十三次、華嚴。法華経はですね、不次第行ですから、十信の前にも五品の位があるんですね。そして初後不二です。初心も後心も、不二。実相の因を修して実相の果を覚る。最初も諸法実相、最後も諸法実相。ですから我々は法華経ですから、最初から仏の心を我が心とすべく修行する。だけどそれがなかなか、やってみると言われても難しいですよ。貪欲はあるし、怒りはあるし、愚痴はこぼすし、なかなかできない。これからわしは、絶対に怒らないよ、と、思ったとすでしよ。そう思っても、ある時、むくむくっと腹が立ってきて、つい怒ってしまった。で、後でしまった、また怒っちゃったと。だけど、これが反省ですよ。反省すれば、まあ怒っても、たまにはしょうがないだろうと、仏様も見ておられる、あるいは見ないかもしれませんが。仏の顔も三度までと言って、もうだめだ、知らんよとおっしゃるかもしれ

ませんけれども、しかし、法華経は、南無妙法蓮華経と唱える人は最初から仏の心を我が心としたりしている。少なくとも一日に一週くらいは考えてみなければならぬ。四六時中そういう事ばかり考えていると、神経衰弱になる。恐らくね。だけどそういう事に段々慣れてくると、そんな事考えていなくなつて、それに合致した状態が持続して保てるようになるだろうと。こういうふうに通つております。私はね、威張るんですけれどもね、最近あんまり怒らんですよ。怒るのが面倒くさくなつてきたのかもしれないけれどもね。そういう氣力がなくなつてきたのかもしれない。だけど、今日は家内が来ておりますけれども、「嘘ばかり」というかもしれない。でもいいんですよ。そういう反省する気持ち、南無妙法蓮華経と唱えている以上は、と言つて反省する氣持を持つているということはいいことではございませんか。

以上「観心本尊抄」についてなお、申し上げておきたかったことを三つほどお話いたしました。従つて、最初の二つはこれから先、「撰時抄」とか、「報恩抄」とかに進んで参りますと、全部、日蓮聖人はそれをお出しになりますよ。で、本尊抄は、最初、御題目、それから本尊、それから戒壇はいちばん最後のところに「一閻浮提第一の本尊この国に立つべし」という言葉が密釈戒壇だという説もござりますよ。山川智應さんあたりがそういうふうな事をおっしゃつておられますよ。しかし、佐渡のいちばん最後の頃の「法華行者値難事」。「法華取要抄」は身延の最初で、波木井殿の館に仮住まいなさつた時に発表なさつた書物です。ですから、御遺文の研究家はこの「法華取要抄」も、草稿は佐渡で書かれたと言つておりますから、佐渡時代ですね。佐渡時代において本尊・戒壇・題目の順序ができてきます。それが一つだけこわれるのが「三大秘法抄」。その中に五回くらいこの問題が出てきますけれども、その中の一箇所に本尊・題目・戒壇となつておるところがあります。それ以外は全部、本尊・戒壇・題目です。これは、ど

うしてかという事を日蓮聖人はおっしゃいませんけれども、やはり「摩訶止観」をお読みになったと。そうすると「摩訶止観」の中に法華三昧というところがありますが、そここのところの式次第を読んでますと、こうなるんですよ。本尊は本来尊重のものですから、元来あるものなんです。だからこれがいちばん最初。で、次に御本尊を安置する場所をつくる、つまり道場。で、その道場の中にこの法華経を信仰したい人が入って行って、御題目を唱えると。そういう順序ですね。だから、そういう順序で日蓮聖人はこういう順序をおっしゃったんだろうと。その後の御遺文は全部これで統一されております。だが、これは本尊抄では出て参りませんね。最初、御題目。それから、御本尊。

以上で「観心本尊抄」講義の締め括りをいたしました。

それから次に、我が教学研究五十年。これは正確に数えますと五十三年間です。いちばん最初は昭和二十四年から二十七年の三月まで、身延山専門学校に奉職いたします。その頃は、塩田義遜、松木本興、室住一妙、それから里見泰穂、林是幹という、錚錚たるというか、いい意味の一癖ある先生方がいっぱいおられた。私が身延山に came した時は、ちょうど江利山義頭上人も同時に身延山に入ったんですね。で、山務司監としてあの先生がまず最初に何を大学の為になさったかという、大学の先生ひとりひとりを本山に呼んで、いろんな事を聞いたらしいんですよ。それで何人が首を切られたですよ。私は身延山に来てすぐですからね、別に何聞かれたってわからないから、行かんでもいいだろうと、行かなかったんですよ。首切られるのかなと思っていたら、お前、寮に行けって。寮監したんですよ。厚德寮の。今の行学寮は非常に整備されて見るも立派ですが、私がおったころの厚德寮はひどいもんですよ。例えば、夜、学生が、学生と言っても私より年上ですけども、絞ったばかりの葡萄酒ですかね、一升瓶に入ったのをぶらさげてきましたですね、「おーい、浅井、呑もう」と言って、寮監室は障子が閉まっているだけですから、その障

子を開けないで、突き破って入って来たんですね。びっくりしたことがありましたけれども、あれは何て人だったんだらうと、よく思い出していたんですけれどもね。遂に思い出せなかつたらば、今から五、六年前ですかね、四国に行つた時に、「あの時障子を開けないで入って来た人がおつたでしょう。あれは私だよ。」と言われてびっくりしました。まあ、そういう事もありました。で、まあ身延山の寮に入つて、いちばん参つたのは食事ですよ。どんぶり飯でね、麦の中にご飯がばらばらと入つている。それを大釜で炊きましてね、おかずはつて言ううと、道に生える野の草。それから大根のお香こ。そして、味噌汁。それぐらいですよ、朝昼晩。で、ご飯を食べるとね、麦の真中に筋があるでしょう、そしてそれに殻が付いている。飲み込むと痛い痛い。そんなんで大変でね、身延山に登つていきますとスーッと痩せていつて、国の長崎にいとブーッと太つていく。でも、今考えると懐かしいですよ。で、そういう中であつて、学校で勉強してきて、それから寮に帰る。学校では、H・ケルンの『The Lotus of The true law』を読んでたですよ。授業を終わると、室住一妙さんあたりが冬になると、畳半畳よりもっと大きな火鉢が今の総務室ぐらいのへんでしょ、あのへんに置いてあつて、そこに炭が真つ赤に燃えておつて。で、その炭はどうするかというと、学生が本山から持つて来るんですね。で、「じゃあ先生、さようなら」と言ううと。「だめ、もう少し居れ。私の話を聞きなさい」と言われて、それから二、三時間、室住先生のお話しを聞いたり、塩田先生や里見先生、それから正田英隆先生もいろいろお話しをしてくださつたりですね。で、それまでは私は御遺文のごの字も読んだ事がなかつたんですよ。大学時代は。十六歳の時に得度したのに、まだ日蓮聖人が右を向いておられるか、左を向いておられるか、何も知らないのです、御遺文を読まなきゃいけないと思つても、どうしようも師父に言つたら、「身延山でやれ」と。それでその頃確か、松木本興さんは布教部長をやつておられたんですかねえ。で、松木

本興さんに師父が電話したら、おいでおいでと言うんで、来たんですよ、身延山に。それで、勉強することになったんです。先生方の話を聞いて、あと、寮監室に戻るとお曼荼羅にかけてある床の間に、毎日ですね、今日はトマト三個、今日はなすび三本とか、今日は大根一本とか置いてあるんですよ。誰がこうやって供えていつてくれるんだろう。しかも新しいのを・・・と、思っておつて、ある日、寮に帰つて行つたら、なんと室住先生だったんですよ。「私が供えていたんだよ。お前は欠食児童だからこれくらいは食べなさい」と言つて、そういうところが室住先生にはあつた。里見先生にもあつた。それから、もう亡くなられましたけれども、坂本幸男先生。この先生は身延山に毎月一回ぐらいですか、集中講義に来ておられて、端場坊に泊まるんですよ。坂本先生が見えると、「浅井を呼んでこい」と。そうすると、坊の学生が「浅井先生、坂本先生がお呼びだよ」と言うからね「はい」と言つて行くとね、晩御飯の用意が二人分してあつてですね、酒も五、六本置いてあるんですよ。お燗酒を。坂本先生は全然呑まないんですよ。「坂本先生すみませんね」と言つと「いいんだよ、お前が酒好きだというのは知っているからね。」と言つて。と、いうようなことで三年間、一生懸命まあ、そうやって尻引つ叩かれながら身延山で初めて御遺文を、始めから終わりまで一回だけ読んだんです。日蓮聖人は本をお読みになる時は、必ずノートをとりながらお読みになりました。それが、今日残っている『要文集』。我々が、その『要文集』を見たつて、どの『要文集』に何が書いてあるかわからないですよ。日蓮聖人はわかつておられたんでしょう。だから、私も日蓮聖人にならつて、いろんなノートを作りました。そして、御遺文の何頁には法華經のこういう事について書いてあるよというノートを作りまして、それを講義の時に持つて来て、見ながら講義をしたらば、立正大学の大学院の連中が「先生それ出版しましょうよ」と言つて、たちまち十人から十五人くらい集まつて来まして、原稿用紙に書き起こして、そして出たのが『法華品類日

「蓮道文集」です。あれを読みますと、いちばん最初に皆がそうやってよつてたかつて作ってくれたんだよと、私は一切、それに対して目を通していませんよということが書いてあります。そしてですね、身延山で日蓮聖人が、右を向いておられるか、左を向いておられるかということを知りました。ところが、今から四年前に身延山の学長選考委員会から、お二人の方が松戸の我が家に、夜の十時くらいですかね、お見えになりました、「浅井さん、学長になってよ」と言うんですね。記憶に残っていませんが、本当はちよつと違つた言葉であつたかもしれませんけれども。立候補したこともないのにそれが当選したつて。まあ、私の分身である家内に、「昔、身延山で勉強を教えていただいたんだし、ご恩返しに行つてきなさい」と言われて「ああ、そうですか、言つてきます」と。それで身延山にお参りいたしましたんですが、どういふふうなお勤め具合であつたか。私自身、半分はもう足腰が痛いし、半分は怠け心があるし。でも、勉強はしたいんですよ。まあ、そういうことで、浅井円道としては、四年間のあいだ精一杯とは言えないんでしようがねえ、ある程度はやらせていただいたのではなからうかというふうに思つております。

さて、それが昭和二十七年の最後の年になりましたから、里見先生が当時の教頭先生でしたかね、里見先生に今年度で辞めさせてくださいと、お願いしたんですよ。そうしたら来年度、専門学校から短期大学になるから、そうしたら君を助教教授に推薦しようと思つてたのにならうかと思つて。結婚するためですと言つたんですよ。と、いうのは、身延山では結婚生活ができません。その頃は給料四千元です。で、昭和二十七年の三月で身延山専門学校を辞めまして、その年の十一月に今の家内と結婚したんですね。そして、結婚して一ヶ月目にですね、今の名古屋の、社会福祉大学がもと社会事業短期大学と言つておりまして、二十八年の四月から開校するので、ついては、すぐ来てくれないかと私のおじにあたる、学長予定者から言われまして、どうしてですかと聞いたら、身内が一人くらい

た方がいいからと言うんで。十一月の末に結婚しまして、十二月には単身赴任でもう名古屋に行きました。それで、翌年二十八年の四月か五月頃にやっと、宿舎を一軒もらって、家内を呼んだ。そこから初めて新婚生活が始まったんですね。で、何を教えていたかと言いますと多分、英語じゃなかったかなと思うんですよ。だけど、あんまり英語は教えないで、ニーチェの話ばかりしておった事を覚えております。そしてら今度、坂本先生が「浅井君、君は今、短期大学にいるそうだけれども、一体何を教えてるんだ」と言われて、英語ですと答えたと思うんですけどね。そして、その通りに言いますよ。「そんなつまらんことよせ。うちへ来い」と。で、そんなこと言っても、学長に、坂本先生が来いというから行きますとは言えんでしょ、それで、「先生、立正大学に来させたかったならば、先生直接来てうちの学長に話してくださいよ」と言った。なんと翌日ね、坂本先生が来たんですよ、名古屋へ。そして学長に話して、そうか、という事になったんでしょね。私はその席にいませんでしたけれども。そして、立正大学の仏教学部の、宗学科をお前やれと、坂本先生が言ったんです。で、その前に身延山専門学校の頃に、日蓮聖人の常不輕菩薩の問題について、僧階論文を出しました。それを大崎学報の百号記念号に載せてもらったりと、まあいろいろありました。だけど、私は日蓮聖人と同じで、伊豆の伊東での「四恩鈔」にですな、この六、七年の間にあるいは一日に一卷、一品、あるいは御題目ばかりだった。ほとんどお経を読んだことがなかったと。なぜかというのと、「学文と云ひ、或は世間の事にさえ(障)られて」読む暇がなかったんだと。学文というのと、勉強ですよ。それほど、日蓮聖人は本を読むことが好きだったんですね。で、その点では、私も同じではないですけども、追体験しております。つまり、御遺文の中に出てまいります、経・論・釈、仏教典籍それはね、昭和二十九年に立正大学に行ったとき、やはり安月給でしてね、月八千円で。食べていけないですよ。本買ったら、お米買う金が無い。だから本当にその頃は、赤

貧あるうが如し。昭和二十九年から四十年まで。まあ、太った豚より、瘦せたソクラテスというようにね。はらべこの方が勉強できるんですよ。そういうようなことで、私は五十三年間、あっち向いたりこっち向いたりしながら、日蓮聖人を中心にして、上の方は中国天台、日本天台。それから横の線では法然とか親鸞とか、そういう方々との比較。そういう方々を読む事によつて、日蓮聖人がいちばんだということがわかるんですね。まあ、そういう事で今日があります。でもいまだに、日蓮聖人がお読みになった本は全部読んでおりません。先ほど七十五と申しましたけれども、今死んでは、日蓮聖人がお読みになった本は自分も全部読もうという願い事が途中で挫折しますから、なるべく頑張つて、これからも周りのひとのバックアップを受けながら一生懸命に生きて、一生懸命に読んで、これからの中心になるのは行学日朝という事で頑張つていきたいと思ひます。今日は長い間、私の思ひ出話をお聞きくださいまして、まことにありがとうございます。